

亀井勝一郎

日本人の美意識

日本人の美意識

日本文化の特徴、及びその文化をめぐって私たち日本人の性格というものがあるとするれば、それはどういふものであるか。この研究がこの四、五年来論壇や文壇で繰り返し取り上げられてきました。どうしてこういふことが問題になってきたかという点、日本という国は非常にむつかしい国で、私たちは日本人としてここに住んでいるが、自分のほんとうの姿というものを見きわめるといふことは大へんむつかしいからです。これは、われわれ

れ個人々々の場合でもそうです。自分という人間は一体
どういう人間か、こう考えてみても、考えただけではわ
かりません。ごくわずかな人がほめてくれますと、大へ
んうぬぼれますし、またごく少数の人間が悪口言ったり、
陰口をきいたりすると、それを聞いてすぐがっかりして
落胆したり、どうも自分で自分を正確に評価するという
ことは非常にむつかしいようです。

ついわれわれは自己評価においては空想的な性質を帯
びやすい。同じことが日本なら日本という国についても
言えるようです。たとえば、戦争中は御承知のとおり非

常に自分で自分を高く評価して、世界的にも優秀な民族であるというふうには、独善的な、極端な国粹主義的な傾向に陥っていました。ところが敗戦と同時に、今度は逆に、日本という国はいつまでたっても四等国である、精神年齢は十二才であるというふうには、自分を低く低く評価するような傾向を持って、劣等感に陥っていたと思うのです。

それならば一体どちらが正しいのか？

本当に、正確に自分たちの性質というものを見きわめるといふことはむづかしいものです。最近文学者も方々

外国を旅行するようになり、冷静な、公平な目で自分の国を振り返るといふ機運が起つてきました。そのためこの数年来伝統文化論とか、日本人とは何かといふふうなテーマが取り上げられてきました。

これは前もって申し上げておかなければいけないのですが、ある人間が一つの長所を持つといふことは、同時に一つの弱点を持つといふことです。いかなる人間も欠陥のない人間というものはありません。もし欠点といふものが一つもない人間がかりにいたとするならば、欠点

がないということがその人間の欠点です。すべて長所があれば欠陥があつて、両方がからみ合つて展開していきます。むろん欠陥というふうなものは、克服しなければならぬということとはわかりきっていますけれど、どうもこれが人間というもののむつかしさで、長所があれば欠陥がある。これは一つの民族の文化についても言えるし、一つの民族の性格についても言えると思うのです。

ごく公平に考えて、日本人にはどういふ長所があるかと申しますと、外来の文化というものに対して非常に鋭敏な感覚を持っているということです。また旺盛な知的

好奇心を持っています。

これは昔からそうです。奈良朝文化そのものが当時の朝鮮や、中国や、あるいは遠くはインドの影響を受けた上で成立したものですし、徳川時代は二百数十年間にわたって鎖国を続けましたが、これは日本の歴史から言うると例外的なことであって、大体日本人は昔から外来の文化を非常に尊重する傾向を持っており、好奇心が非常に強いのです。

これは島国であるということも一つの条件かと思いますが、戦後なら戦後だけ振り返ってみても、特に芸術で

すが、外国のすぐれた文学、あるいは音楽、踊りでも、絵でも、彫刻でも、映画でもすべて一流のもの、つまりすぐれたものであるならば、どこの国のものでも喜んでこれを受け入れて勉強しようという気持を持っていきます。その点、案外民族的偏見というものがない、開放的な性格を持った民族だと思えます。

一々例をあげるまでもなく、この一、二年を振り返ってみても、実に世界のあらゆる国のすぐれたバレエや、映画や、音楽家が続々紹介されて、われわれは居ながらにして、そういうものを聞いたり、見たりすることがで

きるわけで、非常にけつこうなことです。これは科学の場合でもそうです。科学と芸術に関する限り、日本人ほど民族的偏見を持たずに、すなおに喜んで受け入れる、そういう性質を持った国民は世界でも少いのではないかと思います。たとえば外国の場合では、ユダヤ人であるということによって非常に排撃する。どれほどすぐれた芸術家であつても、科学者であつても、ユダヤ人だといふと排撃する。ああいう感じは私たちにはちよつとわかりません。

またピカソは御承知の通り共産主義者です。しかし日

本人の場合にはたとえ共産主義がきらいであっても、ピカソの絵を見て、その絵が非常にすぐれたものであるならば、そういうイデオロギーというものにとらわれずに芸術としてそれを愛そうという傾向があります。ですからソビエトの音楽家が来ても、アメリカのバレリーナーが来ても、いいものならばどこの国のものであっても喜んで受け入れて、それを鑑賞し、自分たちもそれを学ぼうとする。こういうふうな旺盛な知的好奇心と、外来の文化に対する敏感さというものは、今後ますます伸ばしていかなければならない日本人の長所だと思ふのです。

もう一つ考えられますのは、元来われわれ日本人は美術的な国民であり、同時に自然に対する愛情というものを非常に深く持っています。この間も、あるアメリカ人に会って聞いたのですが、そのアメリカ人が言うには、日本へ来てまず驚いたことは、タクシーに乗ったらタクシーの中にいけ花が飾ってあった。外国のどこの国へ行ってもタクシーの中に花を飾っておくというふうなそういう国はない。日本人だけが自然に対する愛情というものを、いかに、また、こまやかに保存しているかということ、自分はそのこと一つで感じとって、大へん好ま

しい国民だと思った、というのです。

われわれにしてみれば、タクシーの中に花を飾るなどということとは当り前の話で、気がつきませんけれども、こういうことひとつをとってみても、日本人は自然に對する愛情、つまり、美というものを日常的に愛する、あるいは美的感覚というものが、きわめてこまやかにすぐれている民族である、ということが言えると思うのです。

もつとも日本の場合には昔から雄大と言えるものがあります。たとえば、エジプトのピラミッドとか、中国の万里の長城とか、ああいう大建造物は昔から日本には

ありません。日本にそういう外来の文化が入ってくると、すべて小さく、こまやかに、同時に洗練されるのです。風景だけ取り上げても、ヒマラヤ山脈とか、ゴビの砂漠とか、それから揚子江とか、黄河とか、ああいう大自然と名づけるものは日本にはない。日本には、畝傍山とか、香具山とか、耳成山とか、飛鳥川——ずいぶん小ぢやかな風景、箱庭式の風景になりますけれども、その小ぢやかなものの中に何か非常にこまやかなものがぎっしり詰まっているというふうな感じですよ。

これは美術工芸品その他すべてに言えます。形は小さ

いが内的に洗練化されていく傾向が昔から強かった。こういう意味で美術的な国民であるということと、それから先ほどお話ししました外来の文化に対して案外偏見がなく、知的好奇心が旺盛であるということ、この二つを私はごく公平に見て日本人の特徴——長所だと思うのです。

ところが先ほどお話ししましたように、長所というものはいつも欠陥と結びつきがちです。今度は欠点の方も二つほどあげておきましょう。

それはどういう欠点かといいますと、外来の文化に対

して非常に好奇心が強い。一流品というものに対して敏感であるということは大へんけつこうですけれども、しかし一つのものに私たちの注意力が集中しない。あれもこれもというふうに極端に分散、あるいは分裂していくというのが最近の現象じゃないかと思うのです。

よく私たち文化人と呼ばれていますが、自分でも反省するのですが、一流の音楽もすこしわかる。映画もすこしわかる、文学もすこしわかる、何でもすこしわかるが、何かバック・ボーンがないというか、一つのを徹底的に追究しよう、しかも時間をかけて、五年でも十年で

もかけて勉強しようとする、そういう持続的なエネルギーというものがだんだん欠除してきている。そして、あれもこれもというふうには絶えず注意力が分散、分裂しているという欠陥を伴ってはいないか、と思います。

もう一つは事大主義と申しましようか、これが一流品であるというふうには人から言われますと、見ない前から感心する癖がある。

たとえば、東京でゴッホの展覧会がありました。そうしますと、上野の国立博物館の前に千人、二千人という人が列を作って入場を待っています。まだ見ないんです。

まだ見ないけれども感心しているのです。そして中へ入るともう汗だくだく。押すな押すな。そうしてフーフー言いながら出てくる。では一体何を見てきたか。押されて何も見てこない。しかし家へ帰ると、ゴツホというのはすばらしかったというようなことを言う。

それからよく私は奈良などへ参ります。そうすると法隆寺の門の前に高校生が、あるいは中学生がたくさん修学旅行で来ている。この高校生や中学生が、法隆寺を見る前に先生方から、法隆寺がいかによいものであるかということをお教えられる。お教えられること自体はけ

っこうですが、見ぬ前にまた門の前で感心しているのは困る。中へ入るとまた押すな押すな。それで出てきて、では一体何を見てきたか。解説をノートに写すのが忙しくて何も見てこないというわけです。

私は、たとえ一流品であつても自分の目で実際に見て、そしてわからないときにはわからないと言えればいいし、感心しなかったときには感心しなかったと言えればいいと思う。一流品というものは十年も二十年もかからなければわからないものです。ところが、私たちは一流品だと言われると、すぐ感心し、しかもその感心の仕方が画一

的で

私の所にも去年まで中学生がいました。今高校生ですが、やはり法隆寺を見てきた。そしてみんな修学旅行のレポートを学校へ出したわけです。そのレポートを見ますと全部が感心しているのです。同じ言葉で感心している。そういうことはちよつとあり得ないはずで

もつとも外国から一流品が続々来ますと、感心しないわけにいかないことは事実です。私も去年はゴッホの展覧会を見て大へん感心しました。その次に東京では尾形光琳の三百年祭の展覧会がある。これを見て非常に感心

した。その次に、光琳の弟の乾山という焼きものを焼く人がいますが、その人の焼きものの展覧会がある。これを見ても非常に感心いたしました。三回感心したから去年はもうこのくらいにしてよしておこうと思いましたが、ところが、モスコ―芸術座が来まして、これまた感心しないわけにはいかない。もういいかげんにしておこうと思ったら、今度はウィーンの国立劇場とかいうのが来まして、それを見たらまた感心した。感心するということはいいんですけれども、何か神社参拝という気持ちいいかもしれません。初めから感心しに見に行くんですから……。

そして感心しないと文化人らしくないというふうにも考えたりしまして、感心のしどうしなんです。

それはけっこうだと思いつながら、他方では、どうも少しこれは変じやなかろうかと思うのです。たとえば、自分にはセザンヌの方がりっぱな絵かきだと思う、しかしゴッホはつまらんと、こうはつきり言い切る人がいてもいいはずだと思ふのです。ところがゴッホがえらいということになりますと、全部がほめる。ここに少し考えなければならぬ点がありはしないでしょうか。

知的好奇心が旺盛で、外国のすぐれたものならば喜ん

で受け入れる。これはますます伸ばしていかなければならない日本人の長所です。同時に美術的感覚が非常にすぐれている。これは伸ばしていかなければならないのですが、その半面に今申し上げましたような、絶えず知的な分裂状態、それから事大主義といいましょいか、もう一流品でなければ見向きもしない、しかも必ず同じような言葉で感心しているということ、やはり反省しなければならぬことではないか、そう思うのです。

その次に何といっても現在の文化で一番大事な問題は、伝統と近代化ということです。日本は千数百年にわ

たる古い伝統を持っていますから、それをどういふふう
に生かしていくかということと、それから明治以後は、
西洋の文化が御承知のとおり急速な勢いで入ってきてまし
た。それをどのように消化するか。この二つ。しかもこ
れが二重の性格を帯びてからみ合っていますから、それ
だけでもずいぶん、私たちはややこしい問題に直面しな
ければならないと思うのです。

そこで私は、日本人の美意識というものをまず伝統的
に振り返ってみて、今後われわれが伸ばしていく、ある
いはもう一ぺん見詰めてみる——そのために、どういふ

ところに特徴があるか、いろいろありますが、今日は二つだけあげてみたいと思うのです。

私は日本の歴史や、日本の美術の歴史、あるいは文学の歴史、その他全体を振り返ってみて、いつも感じるのですが、そのうちの一つはさすらいといましようか、流離——この流離というものに対して、昔から日本人は非常に敏感であって、またそういう物語を好む。

これは国文学者でおなくなりになりました折口信夫博士の御本にも書いてあることではありますが、「貴種流離譚」——これはどういいう物語であるかというのと、一人の

主人公が諸国を放浪して、流れ流れているいろいろ艱難辛苦し、あるいは受難して、最後には滅びていく。たとえば古代における日本武尊、それから中世における義経、弁慶——義経、弁慶などは一番典型的だと思います。

「平家物語」などを見ますと、義経は御承知の通り非常に勇敢な、機敏な將軍として描かれていますけれども、いよいよ没落して奥州平泉の方へ行ってから、義経に関する伝説がたくさん生まれます。「義経記」と呼ばれています。ですが、それを読んでみますと、義経というのは、ちやうど貴公子のように弱々しい主人公になります。その

かたわらに弁慶という強い人間が一人つき添って、そして安宅の関を通り、奥州の方へだんだん落ちて没落していく。日本人が好きな芝居は昔から勧進帳と、忠臣蔵と、白浪五人男とこの三つですが、ことに弁慶、義経というのはすごく好きです。

これはお能だけじゃない。歌舞伎でもそうですし、現代でも大衆小説の中で一番人気のあるのはやはり義経と弁慶を扱った物語です。

これほど古代、それから中世、近世、現代と貫いて、われわれ日本人が昔から一番愛してきた物語というのは

「貴種流離譚」つまり流離の物語です。これは現代でもそのままずっと続いてきています。たとえば、島崎藤村の詩集がなぜあれほど読まれているかというと、それは流離のうたですから……。つまり「小諸なる古城のほとり」とか、「椰子の実」とか、みな、さすらいの嘆き、あるいはさすらいの悲しみというものをうたっています。

それから、日本の文学者の存在の仕方そのものが、また流離の形態をとります。たとえば中世に例をとりましたが、歌を作ったり、あるいは随筆を書いたり、西行と

か、長明とか兼行法師とか、あるいは江戸時代になりま
すと芭蕉が代表ですが、この人たちはみな世の中を捨て
る、つまり世捨人という形をとって、そして絶えず全国
を旅行して歩く。つまり漂泊の旅に上る、さすらいとい
う、これが中世の人間の生き方の典型です。また中世人
はこういう形で自由というものを求めたわけです。

それが明治になっても藤村のようにさすらい調——さ
すらいの調べというものが非常に強くわれわれ日本人の
心の中に深く入ってきています。これは文学だけではあ
りません。流行歌をとってみましても、流れ流れてとい

う調子です。「落ち行く先は南はジャワよ」というふうな歌が昔ありましたが、弱々しい主人公なのです。あまり強い主人公では困る、弱々しい主人公、しかも生まれが高貴な家に生まれなければならない、つまり今の言葉でいうと斜陽族です。斜陽族であつて、そして弱々しい、しかも悲劇の中心人物である。それがあちらこちらでいろんな災難にあいながら全国を放浪して、しまいには倒れる。これに対してわれわれ日本人は昔から実に涙もろいし、またこういう形の物語というものを愛してきたのでして、私はこれを流離の美しさとして日本人の美意識

の中の一方向の典型に数えたいのです。ですからある意味で非常に感傷的な国民であるとも言えます。

それからまたこの流離の美しさというものはその反面に必ず先ほど申しましたように欠点もあります。どういう欠点かと言いますと、私たち日本人は非常に「涙」が好きです。もう一つ、これも私はしばしば自分の本でも繰り返しているのですが、涙ともう一つ「死ぬ」ということが非常に好きです。ほんとに死ぬのでなく「死ぬ」という言葉を乱用することが好きです。

もうこれはストライキでも、それからスポーツでも何

でもすぐ「決死の覚悟」、それから「死ぬつもりでやる」、それから「命がけでやる」と言います。スポーツマンでも外国へ行くときは、「決死の覚悟で行ってきます」と言いますけれども、スポーツというものは死ぬ覚悟でやるものではないので、あれは遊びです。ところが必ず「決死の覚悟」。ストライキでもそうです。それでいて本人は絶対に死なないのです。

それから次に涙を流す。涙を流しますと、流した本人はそれによって自分の責任はのがれたという錯覚を抱く。またその涙を見るわれわれは、合理的にものを考え

なければならぬのを、涙によってごまかすという性癖があるのです。涙と死ということによってずいぶん私たちは自己欺瞞に陥っていやしないか。流離の美しさというものの自体が、私は日本人が今までずっと愛してきた物語の原形で大切なものだと思いますけれども、その反面に今申し上げましたような日本人の一つの欠陥も伴っている。しかし、私は流離の美というものを日本人の美意識の中の一つの大事な要素としてあげてみたいと思います。

それからもう一つは陰影の美です。これは谷崎潤一郎

氏に「陰翳禮讃」という有名な本があります。ニュアンスです。日本人はニュアンスの美しさというものに対して非常に敏感です。これには、谷崎潤一郎氏の「陰翳禮讃」にも書いてありますが、われわれが昔から住んできた日本家屋の構造というものが一つの大事な条件になっています。

京都のように焼け残った町の古い日本家屋を見ますと、かわら屋根です。あるいは、農村の場合にはわらぶき屋根ですが、上から下へ押えつけるような重さ、そして軒、あるいは、ひさしというものが非常に深くて、そ

ここに薄暗いやみがただよっています。外観から見ても外
国の建物に比べますと、一種のほの暗さというものがそ
こにあります。

それから屋内に入ってみます。屋内に入ってみますと、
私たちが日本人は小さいときからこういう光の中で生活し
てきたかということが、私たちの感覚というものを考え
る上に大へん大事になってきます。普通の日本家屋を想
像してみますと、すぐわかりますが、日本家屋の中で比
較的暗い部分は床の間、そこには薄やみがただよって
います。それから障子を締め切りますと、太陽の光が直接

入ってこないのので、障子の紙によって太陽の光というものは一たんそこでやわらげられる。この障子によってやわらげられた光と、それから床の間にただよう薄やみと、この総合が融和して、そこに非常におだやかな独特の光線というものが成立するわけです。これがわれわれの祖先の発明した光線です。

われわれはそういう光線の中で平生ものを見たり、あるいは美術品をながめたり、自分の身の回りのものを調べたりしているわけで、こういうことが私たち日本人の感覚というものを非常にデリケートにしているだったので

なかろうか。この陰影の美というものが大事な一つの問題として取り上げられていいのではないかと思います。もつとも現代になりますと、西洋風の建築がどんどんでき上りまして、太陽の光も直接入ってくるし、また障子のかわりに窓ガラスをつけるようになってきました、陰影というものはだんだん薄れていくような傾向があります。けれども、町のアパートなんかをごろんになるとわかりませんが、鉄筋コンクリートの四階づくりで、さぞかし殺風景だろうと思うけれども、やはり窓の先にへちまをかからませたり、朝顔のはちをそこへ並べたりしまして、何

か自然によってそこに一つのニュアンスというものを構成しようとする懸命な努力、しかも無意識の努力がそこに現われているということとは、非常に興味深いことではないかと思うのです。こういうふうになニュアンスというものも昔から尊んできた国民であるということ、これはやはり私は日本人の美意識の中の大事な問題として取り上げていいのではないかと思います。

ところがそこにも一つの欠陥が出てまいります。どういう欠陥かと言うと、昔からわれわれ日本人は論理的なものと考え方が非常に下手でした。これはだれでも言う

ことですが、論理性というものが非常に欠けていまして、表現力というものがあいまいです。

あいまいな表現、日本語のあいまいさということがよく言われます。これは王朝時代の物語を読んでみても主語がないのです。私なら私、彼なら彼、お前ならお前というはつきりした呼びかけ、あるいは主語というものを省略してしまって、読んでいると一体だれが主人公で、この言葉をだれが言ったのかよくわからない。そういうあいまいさというものがある。しかもそのあいまいというところが、とうとうといこととされてきた習慣があります。

その証拠には、私たち日本人には、どこか心の中でゼスチュアというものを軽蔑する傾向があると思うのです。たとえば外国の映画などを見ていたり、外国人と話をしていますと、外国人はすぐ指を一本立ててみたり、両手をパツと開いてみたり、肩をちよつとすくめてみたり、それから目を片つ方つぶってみたり、実に表情たっぷりです。われわれ日本人が——お芝居などは別として、平生、もし友だちとつき合うとき、あれと同じことをやったら、「あいつはきざなやつだ」、「何といやなやつだろう」とすぐ言われます。つまり大げさなゼスチュアと

いうものを日本人は昔から好まなかつたし、またそういうものを身につけなかつた。そのかわり、どういふふうな方法をとつたかという腹芸です。

どうも腹芸という言葉自体が非常にむつかしいのですが、つまりすべてを言い切らない、すべてをはつきりさせない。どこかにニュアンスを残しておくか、あるいは暗示的にしかものを言わない。そういう性格からお能のようなものができたり、俳句のようなものができて、一つの象徴芸術として完成したわけです。

けれども、その反面に今申し上げたような言葉の不明

確性という欠陥を伴っている。どういう長所にも必ず欠陥があるということを申し上げましたが、先ほどの流離の美には涙、あるいは死というセンチメンタリズムが伴うし、それから陰影の美というものには、今のような一種のあいまい性というものが伴うのです。

しかし、そういう欠陥はなるべくは克服していった方がいいと思うのですが、長所が伸びるためにはどうしても今のような欠陥が伴いやすい。しかもわれわれ日本人の美意識というものを考える場合には流離の美と陰影の美、この二つが一番大きな要素として今日まで続いてい

るのではなからうかと私は思うのです。

それからまた宗教の問題に限定して申し上げますと、キリスト教の立場からしますと、われわれ日本人は、昔から非常に罪悪感が稀薄であるということ、よく外国人は指摘します。

親鸞などは罪悪感の非常に深い人で、親鸞を持ち出して、日本にもこういう人がいたということとは言えますけれども、概して日本の歴史を一般的に振り返ってみますと、ことにキリスト教的な観念からみますと、罪悪感というものは非常に稀薄です。

しかし罪悪感が稀薄であるかわりに何が発達したかというところ、無常感です。あるいは日本人の場合に無常美観といってもいいかと思うのです。中世から近世・現代までわれわれの心の中——これは感情として続いているのですが、それは無常感です。現在では「あわれを知る」とか、あるいは「あきらめ」というふうな感じとしてみると、然として残っているわけですが、元をたずねてみますと、日本人の心の中に非常に強く入っている一本の線があるとするならば、それは無常感です。

この無常感が罪悪感というものを上回るわけです。す

べてのものは生成し、流転し、消滅する。どのようなものでも一時も立ちどまることはないというその無常性、無常感というものによって、罪悪感を帳消しする傾向が昔から強かった。その無常感もまた無常美という美に結晶していったときに、初めて日本人の心の中に強い影響力を与えたように、これは歴史を振り返ってみるとそういうふうに見えるのです。

ですから最近よく日本人は道徳観念が乏しいというよ
うなことを言う。確かに現在は道徳というものは衰えて
いるかもしれませんけれども、しかし日本人の場合には

道徳観念が美観というものにかわっている。美観がその代用をしているわけです。つまり私たちが善悪を判断するときによく用いる言葉ですが、「きれいか、きたないか」ということばを使います。「あの人間は悪人だ」と言わなければならない場合に、「あの人間はきたない」ということを言う。「あの人間は非常にりっぱだ。すぐれている」ということを言うかわりに「きれいだ」という。きれいか、きたないか、つまり清潔感と不潔感という美的意識というものが罪悪感を代用しているというところが言えるのではないでしょうか。これはキリスト教と

仏教、及び日本人の特殊性というものがありませんから、すべてキリスト教的観念だけが正しいということとは言えないと思います。しかしそのキリスト教の方から見ますと、日本人は確かに罪悪感というものは稀薄であって、どちらかというは無常感、あるいは無常美観というものによってそれを代行してきたのではないでしようか。これはやはり日本人の美意識の一つの大事な問題として、もう一ぺん私たちが今日振り返ってみなければならぬ大切な問題だと思ふのです。

それからもう一つ直接私たちに関係がありますのは、

われわれの日常の表現能力です。私の持論として、言葉というものは精神の脈搏のようなもの、われわれ病気のとき医者へ行つてまず脈をとってもらう、脈が變つているとからだが悪いということとはわかります。それと同じように言葉というものは精神の脈搏であつて、その人がどういう種類の言葉を使っているかということ調べますと、その人の精神状態というものは一挙にわかるわけです。そして言葉というものの中に、われわれの日常の美意識というものが端的に、にじみ出てくるわけですから、それだけに自分の言葉というものを絶えず吟味して

みる必要があると思うのです。

私は美しい言葉、健全な言葉というものが発生する順序をいつも考えるのですが、その一番根本にあるものは言うまでもなく深い感動です。

たとえば皆さんがすばらしい音楽を聞いたときとか、あるいは心に何か悩みを持つとき、そういう感動とか深い悩みを持つ場合に人間はどうなるかというところ、沈黙せざるを得ないので。つまり自分がほんとうに言いたいと思っっていることほど人間というものは言えない。ところがその言えないと思うことほど人に言ってみたい。こ

れが人間の表現能力というものです。

われわれが文章とか言葉で何か自分が考えていることを言いたい、一番言いたいと思っっていることは、必ず一番言いにくいことなのです。その言いにくいことを言おうと思うからこそ初めてそこに言葉との格闘というものが生ずるわけです。

同時に人間の言葉というものがいかに不完全で不自由なものであるかということが、そのとき初めて自覚されるわけです。そういう自覚を持つということが言葉を開拓する原動力となるのです。またそのことが私たちの精

神というものを形成していくための基本的条件になるわけです。

よく精神の形成とか、精神を強くするとか、精神という言葉を使いますが、その精神というものは、具体的に自己の表現能力を養うということです。そして自己の表現能力を養うということの根本には非常に深い沈黙というものがなければなりません。

現在の非常な大きな欠陥は、深い感動というものがだんだん消滅してきたことです。一流の芸術家が来たり、いいものをたくさんわれわれは見たり聞いたりすること

ができませんけれども、先ほど申しましたように、そのせ
つかくの好奇心が分散、分裂しているものですから感動
が浅い。感動が浅いかわりに今度は刺激を求めようにな
る。私たちの感覚が衰弱した場合、その現象が一番先
にどこへ出てくるかというところ、必ず刺激を求めるところ
です。これは肉体的な条件の場合でもそうです。今まで飲ん
でいた薬ではきかなくなるからもっと強い薬がほしい。そ
れを飲みますと、それでもきかなくなつて、さらにもつ
と強い薬をほしがり、だんだん刺激を強くしていかない
ときかなくなる。

それと同じことが精神の上にも現われるわけで、刺激が強くなかったり、あるいはどぎつくない場合にはそれに関心を持たない。これがわれわれの感覚が非常に鈍感になった場合の徴候です。

現在のいろんな——テレビとか映画・週刊誌とか、そういうものを見ても、すべて露骨でどぎつい。そして、その反面にほんとうの意味での感動というものが稀薄になってきている。

それから、深い沈黙というものが同時になくなつて、そのかわり饒舌——おしゃべりということが非常に多く

なる。だれでも筆をとって、だれでも書く、だれでもすぐものが言える。ものが言えるということはけっこうですけれども、ほんとうに自分の言いたいことを言っているかというところ、だれも自分の言いたいことを言っていない。つまり、先ほど申しましたように、感心するときにはみんなが一緒に感心する。非難するときにはみんなが一緒に非難する。だれの言っていることを聞いてもみんな同じ。その人の固有の力というものがそこに発揮されていないということは、その人自体の言葉を持たないということ。言葉ほど実に不自由で、不完全で、しかも言

葉ほどデリケートなものはないのです。

よくわれわれはお友だちや、いろんな人と話しまして、あなたの気持はよくわかったなどと言っていますが、あれは誤解しているのであって、人間同士、ほんとうに理解し合うということは容易なことではない。それほど人間の言葉というものは不完全であるということをはっきり自覚したときに、初めて私たちはお互いにこまやかな心になって、つまり人間の心のニュアンスに対する愛情というものを持つことができるとなると思うのです。それが私は人間に対するほんとうの愛情だと思いま

す。

日本人の美意識と言っても、何もわれわれから遠くかけ離れたところにそういう美というものが存在するのではなく、私たちが日常使っている言葉とか、あるいは自分の身の回りのちよつとした品物とか、その品物の選び方とか、そういうところにも私たちの美意識というものは端的に表現されるわけです。

日本は美術国民だと申しましたが、すぐれた美術は何も博物館にだけあるわけではないのであって、たとえば町を歩いていて、街路樹の並べ方とか、ちよつとした、

そこに置いてあるベンチのデザインとか、あるいは町かどに置いてある彫刻とか、ポストの色とか、電車の色彩とか、そういうわれわれの身の回りにあるものが、すべて私たちの美術的感覚を養うわけで、あまり妙な彫刻などを町のまん中に立てない方がいいと思うのですが、とにかく、そういうふうな日常性によって養われるものであるということをも含めて、私たち日本人の美意識、その伝統と現在における現われ、あるいは危険な徴候があるならば、その危険な徴候ということをもう一度はつきり自覚してみる必要があるはしないかと思うのです。

これはだいぶ大きな問題ですけれども、きょうは私が最近考えた中でも私にとって非常に興味深い問題、流離の美と、陰影の美と、それに伴ういろんな長所、欠陥、ことに私たちの日常の言語生活、そういうことについての感想を申しあげた次第です。

日本文学電子図書館

日本人の美意識

著 者：亀井勝一郎

制作者：宮澤一郎

底 本：「日本人の美と信仰」
大和書房

1968年6月10日 初版発行

日本文学電子図書館